

平城京右京三条一坊十坪の調査

— 第572次

1 はじめに

本調査は、店舗建設にともなうものである。調査地は、平城京右京三条一坊十坪の西端に位置し、調査区西半は十坪と十五坪の間の坊間西小路の想定位置に該当する。これまでの十坪内の周辺調査は小規模のものが多く、それぞれ柱穴が数基検出されている程度で、坪内の利用の実態は十分にはわかっていない。

調査は、2016年6月24日から7月26日まで実施した。調査面積は東西13m、南北9mの117㎡である。

2 基本層序

現地表から、黒色粘質土（水田耕土、約20cm）、灰黄色粘質土（水田床土、約30cm）、黄褐色粘質土（約10cm）、黄褐色砂質土（約10cm）、暗灰色砂質土（約20cm以上）と続く。古代の遺構は地表下0.5mの黄褐色粘質土上面で検出した。黄褐色粘質土より下が地山である。遺構面の標高は、64.9～65.0mで、西から東へ緩やかに傾斜している。

3 検出遺構

東西溝2条、斜行溝2条、掘立柱建物2棟を検出した。

東西溝SD3441 幅1.0m～2.2m、深さ0.2mの東西溝。調査区中央で長さ約12.6m分を検出した。後述のSB3443、SD3442よりも新しい。時期を特定できる遺物は検出されていない。

東西溝SD3442 幅0.5m～1.2m、深さ0.2m～0.4mの東西溝。調査区中央で長さ約7m分を検出した。SD3441とほぼ同じ位置に重なるが、やや北にずれる。出土した土器の様相から庄内式期新段階の溝とみられる。長さ1.7mの杭状木製品が出土した。

斜行溝SD3446 調査区西南部で検出した幅約0.8m、深さ約0.2mの溝。出土した土器から庄内式期とみられる。

掘立柱建物SB3443 梁間2間、桁行5間以上の南北棟掘立柱建物。桁行・梁行とも柱間約1.8m（6尺）等間、柱穴は約0.6m四方で深さは0.1～0.2m程度遺存している。抜取穴から奈良時代の瓦が出土している。重複関係

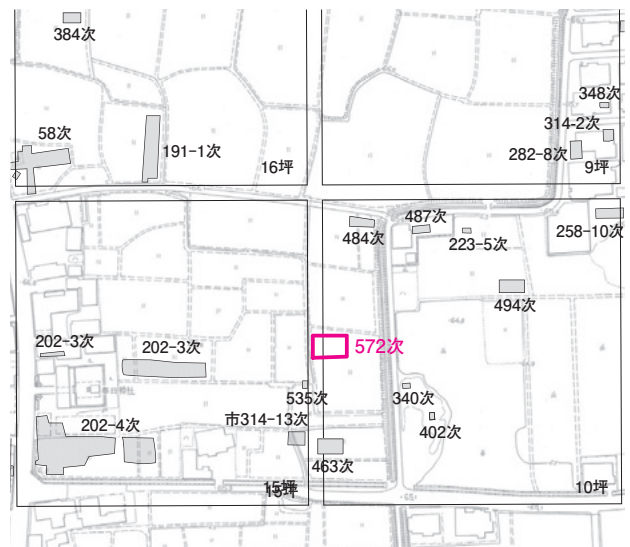


図283 第572次調査区位置図 1 : 3000

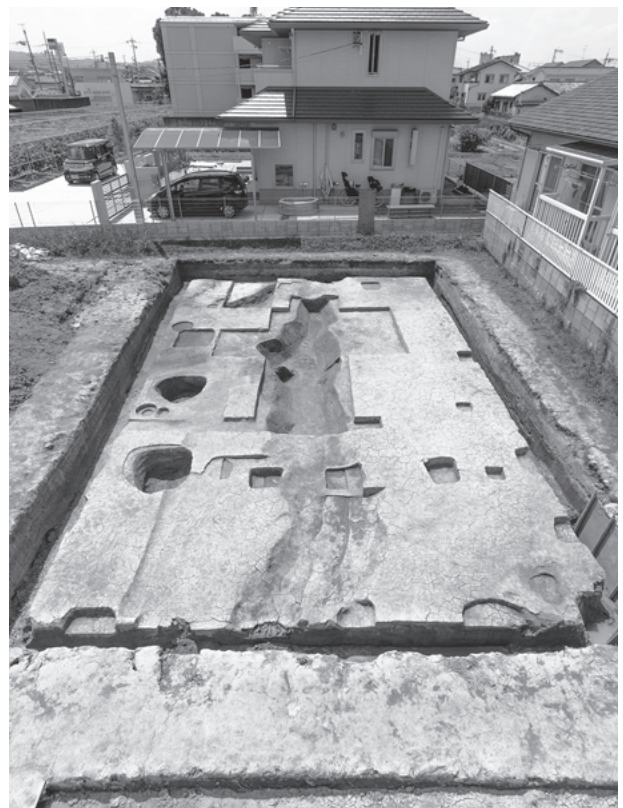


図284 第572次調査区全景（東から）

から、SB3444より新しく、SD3441より古い。

掘立柱建物SB3444 梁間1間分のみ検出した南北棟掘立柱建物。南の調査区外へ続くと思われる。掘方が約1m四方の柱穴をもち、柱は抜き取られている。抜取穴から須恵器片が出土した。重複関係からSB3443よりも古い。

柱列SA3445 調査区東北に位置する柱列で、東西に約2.1m（7尺）等間で並ぶ柱穴3基を検出した。東の調査区外へ続く。約0.3m四方の方形の小型の掘方をもつ。

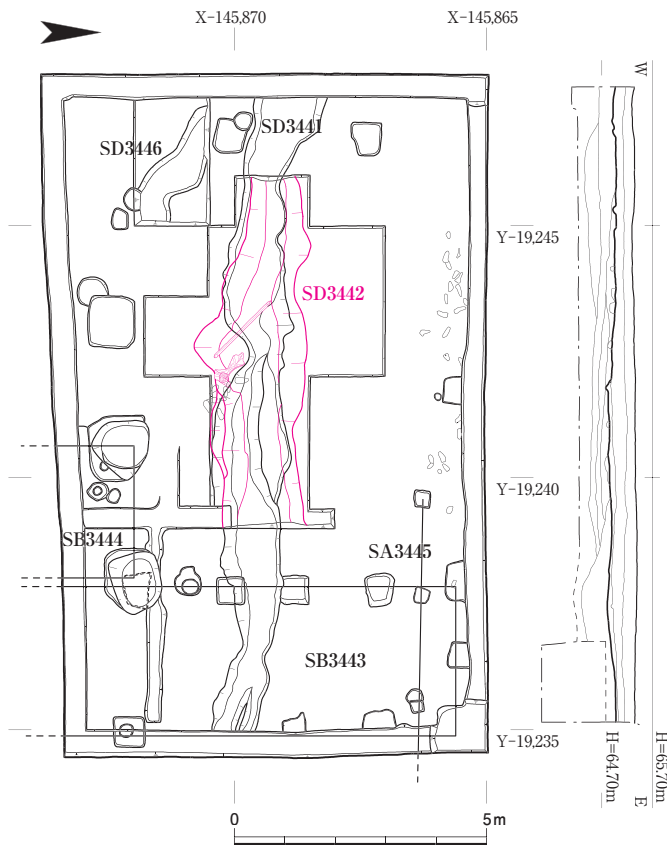


図285 第572次調査遺構図・土層図 1 : 150

このうち中央の柱穴では直径0.15mの柱痕跡が認められた。西の柱穴の抜取穴からは、須恵器片が出土した。

このほか調査区北端と中央部では、検出面である黄褐色粘質土で足跡を多数重複して検出した。(国武貞克)

4 出土遺物

土器 本調査では整理用コンテナ4箱分の土器が出土した。古墳時代初頭の土師器が主体で、一部奈良時代の土師器・須恵器が混じる。SD3442およびSD3446の出土土器を図示した(図286)。東西溝SD3442からは、弥生第V様式系甕、庄内式甕、東海系台付甕の台部が出土した。庄内式甕(1)は、肩部外面に右上がりの細筋の叩き目が施されたのち、左上がりの刷毛目が見られる。口径15.2cm。以上から、同溝は庄内式期の新段階に収まる。

斜行溝SD3446からは、弥生第V様式系甕の小片とともに大型鉢(2)が出土した。口縁部は受口状を呈する。口径20.0cm。庄内式期とみられる。(山藤正敏)

瓦磚類 本調査区では軒丸瓦6307Aが1点、丸瓦5点(0.225kg)、平瓦46点(2.861kg)が出土した。6307AはSA3445の柱穴から出土、第II期後半のもの(図287)。

(岩戸晶子)

木製品 SD3442から杭状木製品が出土した。長さ1.7

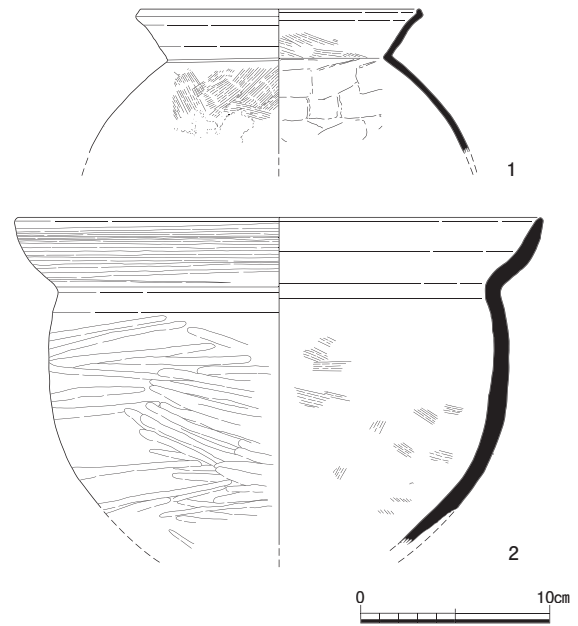


図286 第572次調査出土土器 1 : 4



6307A

図287 第572次調査出土軒瓦 1 : 4

m、直径約6cmで、樹皮を剥いで表面を滑らかに削っている。末端部は、表裏面が削られて薄くなる。

5 まとめ

今回の調査区内で想定されていた坊間西小路東側溝は、検出されなかった。本調査区から約36m南に位置する第463次調査でも東側溝は検出されていない。

南北棟掘立柱建物SB3443が1棟検出された。また、これに先行する建物SB3444が調査区南側に展開することがわかった。これらの建物は、柱穴からの出土遺物により奈良時代のものとみられる。SD3441は重複関係からSB3443よりも新しいが、時期を特定できる遺物は検出されていない。しかし、十坪の南北の中軸から3.9m北に位置するため、坪の中心を通る坪内東西道路の北側溝の可能性もある。右京三条一坊十坪の土地利用のあり方については今後さらに調査事例を積み重ねて検討していく必要がある。(国武)